# JAIR NEWSTETTER

# 日本国際政治学会

No. 48 July 1989

# 時事問題講義にのめり込む

谷 川 榮 彦(九州大学名誉教授)

この3月,35年間勤めた九州大学を定年で退官した。 比較的恵まれた研究環境にありながら大した成果も挙げ えず,徒らに馬齢を重ねてきたことに忸怩たるものがあ り,いまさらながら<学ぶ者老い易く、学成り難し>の 感しきりである。これは云うまでもなく自らの能力不足 にかかわる問題であるが、それを別にすれば、この十数 年来、講義にのめり込みすぎた点にも関係がある。

大学の教職にある者、研究・教育・行政の三つの任務を果たさねばならないことは百も承知していたが、若い頃から、研究第一・講義第二、の雰囲気の中で過してきたせいか、正直云って、講義が憶劫でたまらなかった。しかし、1960年代末から70年代前半にかけての例の〈大学紛争〉を経験し、また多人数相手の私大にも出講するようになり、わたくしの議義に対する態度も変った。一人でも多くの学生を引き付け、相通ずる土俵をつくった上で議義やゼミを進めることが大切であることを痛感するようになった。

とはいえ、その方法が問題であった。学生・若者の \*三無主義、(無気力・無関心・無責任)や大学の \*レジャーランド化、が指摘される状況のなかで、どうすればいいのか。実際、講義をとおして知っていた国・公・私立大学の学生の多くは、新聞をまず末尾のテレビ欄から見て、社会面、スポーツ欄へと目を通し、それで終わりという風であった。しかしそれでいて、何事も現実の生活に関連づけて説明してやると反応を示し、国際問題にも強い関心をみせた。

そういうことを踏え、いろんな方法を試みて今日に至っているが、その一つは、国際政治に関する90分授業の合間に、〈週刊スポット〉と名づけて10分から15分ぐらい、その時々の国際問題にミニ解説を加える方法である。大きな問題については、わたくしの能力の範囲内で、本番講義を一時中止して数週間にわたる解説を続けることもある。こうした時事問題重視の講義は、二つの点で聴講者の興味を引いている。一つは、それが講義時間中の気分転換の役割を果たし、もう一つは、とくに私立大生にとって就職試験用の常識蓄積に役立つと考えられてい

るからである。

そのことは、受講者との対話の意味で時々実施するアンケート調査からも確めることができるが、その用紙には勝手に雑多なことが記されていて参考になる。例えば、半年も聴講しているうちに《新聞を \*前、から読み、国際面にも興味を持つようになった自分がうれしい》などとある一方、講義の口調が速くてノートがとりにくい等等の苦情も書き込まれている。また、わたくしの人相がフィリピンのラモス国防相やコアラに似ており、声はアニメ《怪物クン》のドラキュラに似ているともいう。これら感想やメッセージの幾つかを選んで講義のとき紹介すると、予想以上の反響が返ってくる。これはラジオのリクェスト番組で自分の投書が読み上げられたときのような快感を覚えるかららしい。

こうして、十数年来出講している私大では、学生たちの口コミも手伝って受講生が年々増え続け、現在では毎週1,000人余の聴講者を相手にリピート講義を行っている。この点、所期の目的を達しつつあると云えるかもしれない。しかし、講義の準備に追われる毎日である。新聞2紙の関係記事を切り抜き、整理することから始めねばならない。新聞休刊日が新聞少年とともにうれしくなる。永い間このようにして、時事問題に関する各種情報の収集・整理・分析、そして講義と、のめり込んで手間ひまかけているうちに、肝心の特殊専門分野の研究がお留守になってしまった。自らの不明に悔いが残る。

しかし、わたくしと学生たちの年齢差は \*シーラカンス、と \*新人類、との違いにも喩えられるが、お互いに <人生意気に感ず><話せばわかる>の相通ずる感動を かみしめながら、去る2月の九大での最終講義を終える ことができたことをうれしく思っている。

今後は心機一転,やり残したベトナム戦争や東南アジア・ナショナリズム等の研究にも挑戦していきたい。制度としての大学には定年や卒業があるが,人生の大学にはそれはない。老骨に鞭打って研究や講義に,もうひと踏んばりしたいと張り切っている。一層のご指導ご鞭撻をお願いしたい。

# 春季研究大会概況

### 共通論題 『国際政治の構造変動と 地域の新展開』

本共通論題の目的は、現在急速に展開しつつある国際政治の構造的な変動を長期的な視野にたって特徴づけ、さらにそれに伴う地域の国際関係の新たな展開を明らかにしようとすることにあった。

山本(満)会員は(「国際政治の構造変動」), 現在進行 中の構造変動は、ある1つの体系から他の体系へ移行す る長期の過渡的な過程であると捉える。そして、その特 徴を,(イ)脱体制イデオロギー(社会主義イデオロギーの 終焉---ソ連などにおける市場メカニズムの導入、開発 途上国における<ソ連モデル>の放棄), (回脱冷戦 (米国 がソ連を<通常の手段>で交渉できる相手とみなすよう になること)、い脱国民経済(国家間の経済交流の加速化 に由来する世界経済の成立と国民経済の自立性の著しい 低下), の3つに求める。しかし、(イ)に関しては、資本主 義はトータルなヴィジョンではありえず、貧困、自由な どの基本的な問題が未だ残っている。(ロ)に関しても、そ れは西側先進国間の, たとえば経済政策の調整を困難に している。また、いに関しては、世界経済に<公共的な 部門>が欠如していることに由来して、現在さまざまな 問題(たとえば国際通貨問題)がひきおこされている。

林会員は(「第三世界の新たな力学と秩序」),第三世界をめぐる環境の変化を,東西冷戦期,中ソ対立期,そして多極化進行期の3つにわけて分析した。そして,70年代から現在に到る多極化進行期においては,一方では大国介入,代理戦争という形での第三世界の紛争は減少しているが,他方では自立と発展の相互矛盾から,第三世界における紛争は全体としては減少していない。そこで特徴的なことは,地域的な覇権国が,地域における秩序を作りつつある一方,その覇権的な行動によって,紛争をひきおこしていることである。このような地域紛争を制御するものとして,たとえば,地域大国の国連安全保障理事会への加入,地域協力体の平和維持機能の強化,などいくつかの方策が考えられる。

金丸会員は(「EC統合と隣接地域へのインパクト」), 学の増田会員より1950 EC の〈92年の統合〉に焦点をあわせ,EC 統合の目標, った「アチソン演説」 機構改革について,その進展を明らかにし,そのうえで, それがもたらす国際政治へのさまざまな影響を分析した。 間が提出された。戦後まず,EC の体制強化は欧州同盟への第1歩であり,明 りカの圧倒的な軍事力らかに EC の(対外)交渉能力を向上させるものである。 帰することができた日そして,それは,一方では,対外的にコメコン諸国, EFTAをまき込み,かつアジアなどに〈地域化の連鎖反 を大いに盛り上げた。 応〉をひきおこし,他方では,対内的に〈92年の統合〉

の過程における EC と加盟各国との間の相互作用のなかに、特定の分野に限ったものではあるが、〈近代国家の解体過程〉ともいうべきものをみてみてとるができる。

初瀬,油井両会員から,討論者として詳細なコメントがあり、次いでフロアからきわめて多数の質問が寄せられ、熱心な質疑応答が行われた。 (文責 山本吉宣)

#### 部会 『日本外交史』

部会 I・日本外交史の報告は、国士館大学・池田十吾会員の「石井・ランシング協定をめぐる日米関係―中国に関する日米両国交換公文の成立から廃棄へ」と独協大学・萩原宣之会員の「戦後日本と東南アジア―1945~1955年の軌跡」であった。

池田会員の報告は、1917年11月に調印された石井・ランシング協定の発端は、1915年3月、米国務長官ブライアンが出した声明「日本が極東において卓越する地位をもっていることを認め、米国の中国における活動が政治的でないこと」を再確認することであった。報告はランシング・ペーパーを利用して交渉過程から廃棄まで詳細に研究した成果を披露した。これに対し、協定中のパラマウント・インタレストは日本のみが中国で保持したものか、石井・ランシング協定は日米関係にどのようなインパクトを与えたか、などをめぐる活発な討論が交わされた。

萩原会員の報告は、敗戦後10年間の日本と東南アジアの関係を学会当日配布した詳細な年表を参照しながら、自らの体験を踏まえ同時代史的にエピソードを交えながら紹介した興味深いものであった。例えば1954年に日米間に成立した MSA 協定は「M=求めよ、S=さらば、A=与えられん」の略と当時いわれた。1955年に行われたバンドン会議はアジア、アフリカ諸国の代表を集めた会議であっただけに仏教、イスラム教の休日をはずした結果 4月18日から23日に設定されたなど会場が笑いに包まれることが多かった。

この報告に対し、神戸大学の初瀬龍平会員より、1940年代後半から50年代にかけての冷戦のアジア諸国への影響、朝鮮戦争のインパクトについて質問があり、琉球大学の増田会員より1950年1月の米国務長官アチソンが行った「アチソン演説」に示されるアメリカの「防衛線」の範囲について、台湾は除外されていたのではないかとの疑問が提出された。戦後10年の政治的枠組のなかで、アメリカの圧倒的な軍事力、経済力を背景に東南アジアに復帰することができた日本を、戦前、戦中、戦後を通ずる120年の歴史の中で捉え直すという報告者の姿勢は討論を大いに盛り上げた。 (司会・池井 優)

#### 部会 『安全保障』

安全保障部会の報告は、木村卓司会員(防衛研究所)の「ケネディ政権の安全保障政策と危機管理」と吉川元会員(広島修道大学)の「CSCEプロセスにおけるCBM」であった。

まず、木村報告では、キューバ危機を事例として取り上げ、従来、その最終的局面で決定的役割を演じたのは、マクナマラ国防長官やR・ケネディであったとされていたが、ケネディ・ライブラリーのオーラル・ヒストリーの公開の結果、じつはテイラー JCS 議長、マーティン国務次官補やトンプソン元駐ソ大使らであったことが明らかになったとして、その経緯が具体的に論じられた。そして、こうした新しい事実の判明は、キューバ危機そのものの再検討を迫ることになろうと指摘した。

他方、吉川報告では、全欧安保会議を契機にヨーロッパにおいて進展しつつある信頼醸成措置に焦点をあて、まず、信頼醸成措置の意味づけ、ヘルシンキ宣言の内容とその意義、ベオグラード・マドリードでの再検討会議の経緯を紹介する。ついで、1984年のストックホルム会議で争点となった事前通告の拡充、自発的措置の義務化、制限措置、政治宣言の取り扱い、兵力の削減と CBM をめぐる論議とその成果としてのストックホルム合意の出現の意味、ついで1986年から 2 年間に及ぶウィーン再検討会議の内容を詳細にあとづけ、最後に、核軍縮への発展はヘルシンキ宣言にもとづく信頼醸成措置の遵守にあると結論づけている。 (司会・佐藤栄一)

#### 部会 『1930 年代』

「1930年代」部会では田嶋信雄氏(成城大)は「全体 主義外交と政策決定論――ナチスドイツの対満州国政策 を中心に」と題した報告のなかで、①ナチズム外交史研 究の発展を総括し、そこに「プログラム学派」と「新修 正主義学派」の深い対立を認め、②アメリカ国際政治学 の諸理論を援用しつつ氏自身の分析枠組として「ナチズ ム外交における争点領域モデル」を設計し、③それにも とづきドイツの対「満州国」政策を実証的に分析、④結 論として, イシューを限定しつつも「新修正主義学派」 に近い諸テーゼを提出した。同報告について, 守屋純氏 (早大) から並行機関乱立によるヒトラーの権力維持, 対ソ開戦と対米開戦のいずれをヒトラーが優先させたか. 大木毅氏(立教大院)から政策をめぐる支持と決定の違 い、綱川政則氏(東京学芸大)からナチス体制の確立段 階, 佐藤健生氏(拓殖大)から「全体主義」外交という 用語とアメリカの理論の適用をめぐる問題、石原司氏 (武蔵大) からスペイン内戦と不干渉委員会の関連やラ

インラント再武装について,被多野澄雄氏(筑波大)から独満貿易協定の位置づけについて,それぞれ質問が出された。

坂本清氏 (一橋大院) は「集団安全保障構想をめぐる 確執--1930~1936年」と題した報告のなかで、30年代 の欧州における集団安全保障の試みのうち、東方条約と ドナウ条約に着目したうえで、二構想がもつ補完的機能 が変化して対立する側面が出てきた点、地域的に限定さ れた構想が東欧諸小国の分裂を加速した点が指摘された。 東方条約問題では、構想がポーランド外交の修正を主眼 として起草されたという仮説が示され、各国の外交構想 を踏まえた新資料による再検討の必要性、および、条約 がスローガンに変化し二国間的対独交渉に移行していく, 条約修正による再交渉過程を含めた全体像を構築する必 要性が強調された。同報告について、濱口學氏(国学院 大)から集団安全保障の理論的な問題と20年代の小国へ のロカルノ条約の影響、石原氏からチェコとポーランド の対仏政策の違い、林忠行氏(広島大)からベネシュ外 交について、それぞれ質問が出された。(司会・三宅正樹)

#### 部会 『日米関係』

春季研究大会の日米関係の部会は、2日目(5月21日)の午後だったにもかかわらず、多数の会員が参加して開かれた。まず原彬久会員が日米安保体制の歴史的枠組みについて報告し、日米安保体制の起源は1951年の条約締結の時点と考えられているものの、日米結合関係はポッダム宣言の受諾から対日講和の時点までに固められたと指摘した。そこでの特徴はアメリカの透徹したリアリズムであり、対ソ冷戦イメージ→対日「単独占領」の延長線上に日本の「無条件降伏」を相対化しながら、天皇制の温存を許容したのはその典型的な例である。

自国の安全保障と直結したこのアメリカのリアリズムは、その後の「非軍事化」・「民主化」という価値を織り込んだアメリカ主導の新憲法制定の場合にもみられた。つまり、新憲法(米国による対日安保)が安保条約(日本を対ソ防壁とする)とともにアメリカの安全を確保する一手段だったという見方は十分成り立つ。60年の安保改定も、こうしたアメリカ・リアリズムの戦略的選択として考察されねばならないだろう。

次いで草野厚会員が、次期支援戦闘機(FSX)の日米 共同生産について報告した。1989年2月にブッシュ政権 は、レーガン政権が日本と合意していた共同生産の見直 しを求めたが、4年にわたる協議の末に日本側は自主開 発を諦めて共同開発を決めていただけに、ショックは大 きかった。報告は、この決定が新政権の政策というより も、レーガン政権後期の輸出促進、競争力回復、技術力 保持政策の延長線上にあること,それに政権移行期の人事の空白が影響したことを解明した。またこの問題は,今後の日米関係が経済,安全保障,技術の三つの面の相互に絡みあった複合摩擦の様相を呈する方向に,展開していくことを示しているとも指摘された。

この報告に関しては、細谷(千)会員からある政治学者が仲介して商務省と連邦議会が緊密に協議していたという興味深い事実も披露された。日米関係が転機を迎えているときだけに、参加した会員も質疑応答に熱心に耳を傾けているように見受けられた。

(原彬久,草野厚,五十嵐武士)

#### 研究分科会大会

#### 1. 東アジア国際政治史

1989年度春季研究大会の5月21日,望月敏弘会員(東洋英和女学院短期大学)の「国民党右派に対する評価をめぐって—— 五・四時期における戴季陶と胡漢民——」と石川照子会員(日本学術振興会特別研究員)の「1949年以降の中国女性をめぐる諸問題について」の二つの研究報告が行われた。望月報告は,国民党右派の代表的理論家戴季陶・胡漢民に対する中国内外の研究動向を紹介し,その特徴と問題点を指摘したのち,特に戴・胡の対列強観,大衆運動観,マルクス主義観に言及し,エリート主義的,民族主義的,労使協調的特徴を強調した。石川報告は,49年新中国成立以降の女性問題に対する政策の展開過程を概観したのち,中国女性が現在抱えている教育・就職・婚姻と出産・家事と育児・夫婦と子の姓などの問題を取り上げ,特に最近の「婦女回家」(いわば専業主婦)論争が提起する重い課題を指摘した。

(司会・藤井昇三)

#### 2. ヨーロッパ国際政治史

春季研究大会では、柴田純志会員の「非同盟の起源」、 定形衛会員の「ユーゴスラビアの対ソ連外交と非同盟」 の充実した2報告と、それらをめぐるディスカッサント 磯村早苗会員による精緻なコメントがなされた。

柴田報告は、1961年の非同盟結集に影響を及ぼした様々な要因を、結集のイニシァティヴをとったユーゴ、インド、エジプト3国が直面していた(4)国内問題、(ロ)地域問題、(4)国際環境の3つのレベルで整理し、特に(ロ)に関して地域協力による安全保障の欠如に注目した。

定形報告は、コミンフォルムから追放されたユーゴの 戦後外交はソ連覇権主義との闘いの歴史でありその非同 盟外交は西側陣営、ソ連陣営のいずれにも与することの できないユーゴの必然的な外交路線であり、国内的には 親ソ、親西欧の各民族のバランスをとって国内統合を確 保する手段でもあった、と分析した。

磯村会員は、柴田会員が非同盟運動の国内要因との関 連性を根拠づける事実を見い出せないと述べたのに対し て,非同盟運動が外交と国内問題という2重の要因によ って成立するものであることは理念的にも実態的にも否 定することは困難ではないかと対照的見解を示した。また、 柴田会員が最終的には非同盟を現実変革を示す小国外交 論の枠組で論じると述べたのに関連して、磯村会員は、 最小限 \*報告者の意味する小国論、をより具体的に明示 しておかないと議論の行方が不分明になる恐れはないか. 特に非同盟諸国のように国家中心的で国家主権を強調す る国々の場合、変動(革)論と関連しての議論にはその 点の注意が必要ではないかとの指摘があり、方法をめぐ る活発な論議が展開された。さらに、ユーゴ非同盟外交 がヨーロッパに傾斜しているとの定形会員の指摘につい て, 磯村会員から, 非同盟諸国全体の傾向として今後の 各地域での地域主義的動きの活性化予測と何らかの関連 があるかもしれないと考えさせるものがあるとの指摘が なされた。 (司会・濱口 學)

#### 3. 東南アジア

当分科会は、5月21日、世界経済調査会の中野亜里会員の「グェン・バン・リン体制下のベトナムの対外政策」という報告をめぐり、活発な討論を行った。中野会員の報告の趣旨は、国際環境特に中ソ関係改善とカンボジアをめぐる情勢変化のもとで登場したグェン・バン・リン体制が、国内経済悪化の条件下でカンボジア問題の政治解決、ASEANとの関係改善、対外経済政策の変更等に努力してきたことを、ベトナム側の資料を中心にあとづけたものであった。

これに対し、司会者を含め7人の出席者からそれぞれに質問が出された。多くは中野会員の解釈の適切さないしは甘さについての質問で、中野会員も真剣に回答し、有意義な討論が行われた。出席者は全部で22名であり、本分科会としてはきわめて盛況であった。

(司会・岡部達味)

#### 4. アフリカ

1989年春季研究大会でのアフリカ分科会は、次のようなプログラムで行われました。

- ①報告者:津田みわ(アジア経済研究所)「植民地ケニアの独立運動 ― I MF・世銀・アフリカ ― 」
- ②報告者:大月隆成(慶應義塾大学院)「アフリカ諸国の新経済政策―― IMF・世銀・アフリカ――」

当日の出席者は13名で、上記二件の報告をめぐって熱心な討論が行われました、アフリカ分科会は1983年の創設以来、1987年秋を唯一の例外として、研究大会のたび

ごとに、開催されております。 本年秋季研究大会におい ても開催の予定ですので、報告を希望される方は、小田 までご連絡ください。他薦でも結構です。

(司会•小田英郎)

#### 5. トランスナショナル

トランスナショナル分科会では、下記の二つの報告が なされ、活発な議論が展開された。「東欧新世代運動の 形成と下からのデタントの進展」乾潤一(大阪大学院)、 「国連とNGO」福田菊(桃山学院大学)。 乾報告は、こん にち、東欧反対派新世代の徴兵拒否運動。 エコロジー運動 等を,81年からの東西欧州市民による異体制間民際運動 「下からのデタント」と関連づけて説明し、その特徴と して、脱イデオロギー化を挙げ、中欧の復活を指摘した。 福田報告は, 既に同氏が『国連とNGO』(三省堂)を出 版されていることと、時間の都合で、日本のNGO に焦 点を当て, それが一般公益を目指して組織間の構の連帯 に目覚め、国際化を図る過程を日本のNGOの活性化と 国連活動の相互作用という観点から論じられた。新旧反 対派の世代交代や植民地解放団体とNGOの位置付け等 の質問がでた。 (司会・馬場伸也)

#### 6. 政策決定 • 国際政治経済合同

高柳彰夫会員(一橋大学院)が日本の対外援助政策に ついて広範囲にわたる詳しい報告を行い、それに対 してのディスカッサントとして五十嵐武士会員(東京大 学)が現実的な立場からコメントした。フロアを含めた 討議では, 日本の対外援助政策の基本的な哲学の欠如. また援助を執行する面での実務的問題について多種多彩 な意見が交換されたが, 他方, 研究者として対外政策を 政治学という1つのディスプリンの立場から学問的に分 析するにはどうしたらよいかについても活発な議論が展 開された。後者の点については、今後も引き続いて重要 な課題となるであろう。 (司会・渡辺昭夫/佐藤英夫)

#### 7. 安全保障

89年度春季研究大会では、小柏葉子会員(津田塾大学 院)から、「南太平洋諸国における核問題をめぐる政治 協力」と題する報告をいただき、大沼久夫会員(共愛学 園女子短期大学) のコメントのあと, 活発な質疑応答が 行われた。

当分科会研究会で研究報告を希望される方は, 伊豆見 まで御連絡下さい。若手会員の報告希望を、とくに歓迎 します。 (司会・伊豆見元)

#### 8. 平和研究

岡本三夫会員から「最近における平和研究の動向―88

年 IPRA 総会と89年 ISA 総会に出席して」という報告 が行われた。 IPRA の共通テーマは「平和文化とコミュ ニケーション―脱国家的対話」であり、 ISA のそれは 「国際社会における協力、不一致および平和のための諸 条件」であった。それぞれの大会の部会や参加者(国) や雰囲気などの紹介の後、研究動向として次の3つの論 点から報告が行われた。①偶発核戦争をめぐる背景の問 題,②ソ連の内外政策の変化,③大学における平和学の 制度化とネットワーク(その核はイギリスのロンドン大 学とアメリカのコルゲート大学)の問題であった。特に 第3の論点に関して専門の視点から2つの学会の動向に ついて詳しく言及された。最後に活発な質疑が行われた。

(司会・臼井久和)

#### 9. ソ連・東欧

現在, 東欧での政治改革が注目をあびている中で、今 回は若手研究者によるポーランド及びチェコスロヴァキ アに関する報告が行われた。

広瀬佳一氏(筑波大)「『ワルシャワ蜂起』の政治力学」 では、従来ポーランド現代史の「空白」であった蜂起の 政治的性格をめぐり、亡命政府、ソ連(軍・政府)、ポー ランド共産主義者の三者から分析がなされ、穏健政策が 挫折して党=モスクワ派が主導権を確立していく過程が 興味深く示された。質疑では、亡命政府、軍、共産党が、 個々の場面でなぜ政策転換していったかの根拠の追及が 多く出された。

池本修一氏「チェコスロヴァキアの経済改革」では、 チェコにおける国営企業法の制定について, ソ連, ハン ガリー、あるいは68年のプラハの春の民主化と比較しつ つ,分析がなされた。質疑では、ハンガリーの党の権限 大幅縮小と企業の自主権拡大などと比較して, チェコの 変革の遅れがどこからくるものなのかなど、チェコにお ける改革の不十分さを指摘する声がめだった。

(司会 羽場久浘子)

#### 10. 国際交流

本分科会は,佐藤俊一外務省大臣官房文化交流担当参 事官を特別講師に迎え, 杉山恭司会のもとに開催され, 約15名の会員が出席した。佐藤氏は、「日本の国際文化 交流政策の課題と展望」というテーマで約1時間にわ たり, 5月中旬発表された竹下首相の「国際文化交流に 関する懇談会」の最終報告の要旨について報告を行った。 同氏は, まず, 国際社会の構造的変化の現状を概観し。 その中で文化的要因が如何なる機能を果たしつつあるか を分析し, 文化相対主義の時代における文化摩擦的現象 について、「中曽根発言」等の具体例を引きつつ説明した。

の概要について紹介し、今後推進すべきわが国の国際文 化交流政策の課題として、海外における日本研究、日本 語教育に対する協力、芸術文化交流の充実と基盤の強化、 視聴覚媒体を活用した日本に関する情報提供のあり方、 学術交流および知的交流の強化、国際理解教育の推進等 を挙げ、さらに国際文化交流推進体制強化の重要性に言 及し、国際交流基金の活動基盤の強化、政府部内の連絡 協調体制の充実、および政府、民間の連絡協調体制の推 進の必要性を強調した。

わが国の国際文化交流政策立案の当事者としての佐藤 氏の報告は、フロアーから多くの示唆に富む質問やコメントを誘発し、活発な質疑応答が行われた。今次研究大 会においては、全分科会が同時間に集中して開催された ため、政策立案者と研究者との実りある対話の機会を求 めて鋭意企画された本分科会も、前回に比べて出席者が 少なかったことが、司会者として唯一心残りであった。 (司会・杉山 恭)

#### 11. 日本外交史

本年度春季研究大会においては,日本外交史研究分科会としては,次の二氏による研究報告が行なわれた。

大塚孝明 (鹿児島県立短大特別研究員)「維新外交の 諸問題と日本の対外態度」

田中正弘(国学院大学栃木短大)「初期外務省と外交 文書整備問題――『続通信全覧』の編纂経緯――」

犬塚氏の報告は、維新外交の問題点、攘夷問題、条約改正問題、近隣外交問題(樺太・中国・朝鮮)、維新政府の外交姿勢の諸点にわたっている。これらを通じ、犬塚氏は、明治4年までは欧米諸国との関係では自主外交をもとめ(その点で、神戸事件を通じて日本が屈従外交を行なった、との見方には否定的な見解を示す)。また朝鮮に対しては修理外交をとろうとしたこと、副島種臣の国権外交以来アジアに対して侵略的傾向がみられ、寺島外交はそれを修正しようとしたが、大久保体制のもとでは限界があったことを指摘している。朝鮮遺使の吉岡弘毅の建白書など、貴重な史料の紹介もあった。

田中氏の報告は、『通信全覧』編纂後の、外務省による『続通信全覧』編纂経緯、後者の特徴などについて詳細に紹介したものである。なおそれらの内容については『正続通信全覧』別巻に、田中氏が解題を執筆するとのことであるので、関係者はそれをも参照されたい(雄松堂 近刊予定)。いずれの報告にも、安岡昭男氏(法政大)その他から活発な質問がなされた。

なお日本外交史研究分科会では暫く研究活動が中断されていたが、今後は活動を再開したいと考えているので、研究希望の方は積極的に連絡をいただきたいと思っています。 (司会・大畑篤四郎)

#### 理論と実践の調和を求めて --- 高橋通敏先生のこと

佐藤栄一 (東洋英和女短大)

4月7日午後6時半ごろ、私は赤坂の友人の事務所へ車を走らせておりました。というのは、広尾の日赤医療センターに入院中の高橋通敏先生から数日前に連絡があり、当日友人と連れ立って訪れる予定になっていたからであります。事務所のドアに貼られた「すぐに麻布の善福寺に来られたし」とのメッセージに呆然自失し、ついで涙がとめどなく溢れて参りました。先生は6日午後8時、何の前触れもなく突然他界されたのであります。

高橋先生にはじめてお会いしたのは1973年12月、先生 が駐エジプト大使を最後に外務省を退官されたのち。 (財)日本国際問研究所に理事長兼所長として就任された ときのことでした。それから4年有余にわたる在任期間 中, 私達研究員は有形無形の薫陶を受けることになりま した。勤務時間が5時半に終わると、理事長室はただち に私達研究員のために開放されました。そこでは, 夜ご と, 先生を囲み, 水割りを片手に国際関係のいろいろな 問題に関するブレーン・ストーミングが展開されました。 先生は、問題提起をされ、私達の反応ににこやかに耳を 傾けながら, 国際関係の理論的解明の必要を熱っぽい口 調で力説されるのが常でありました。日米安保条約改定 交渉当時の条約局長としての激務に耐えながら、寸暇を 惜しんで研鑽をつまれ,後年『安全保障序説』で東京大 学から法学博士の学位を授与された先生の理論と実践を ふまえたご高説には強い説得力をもつものが有りました。 それは、学問にとどまらず、ひろく人生にも通ずるもの であり、私達にとっては、正しく「高橋教室」ともいえ るものでありました。この伝統は、1977年10月先生が理 事長を退任されたのちも「バー・国際」とか「バー・問 題」とかと自他ともにみとめられ、本学会員のなかにも 参加されたご記憶をおもちの方も多数おられることと思 われます。

先生は、その後も赤坂のマンションの一室に「高橋国際関係研究室」を構えられ、ここでもまた、外交の理論と実践の統一を強調しておられました。

昨年12月下旬入院されていらい,早期回復を信じて疑わなかった先生に,私達が最後にお目にかかったのは,2月22日のことであります。そのとき,ベッドの上で新学期の講義ノートの準備に熱意を傾けておられた先生のお姿を思い起こしますときに,改めて涙が渗み出てくるのを禁じ得ません。

3月下旬,私は拙い書物を刊行し,その中で生前の先生への感謝の献辞を記す事が出来たことで,せめてものなぐさめにいたしたいと思っております。先生のご冥福を心からお祈り致します。

#### 《海外留学雑感》

**侮れぬアメリカの底力** 丸山直起 (国際大学)
◆◆◆◆◆◆◆

昨年夏から今年にかけサバティカルをとって大学の提 携先のジョンズ・ホプキンズ大学高等国際問題研究大学 院(SAIS)にしばらく滞在した。SAISの魅力はワシ ントンの中心に位置していることであろう。近くにはシ ンク・タンク, 研究所, 大学, 図書館などが集まってい るほか、SAISで開催されるセミナーなどには、国務省 の役人,議員,ジャーナリスト,外交官などが顔を揃え るから、カレントなテーマで研究するには最適の環境で ある。私は多角的交渉のセミナーに参加したが、月1回 夕刻からのセミナーは最初にシェリーを飲みながら雑談 を交わすことで始まる。この種のセミナーやシンポジウ ム、特別講演などはほとんど毎日のように開かれ、内外 の著名人がゲスト・スピーカーとして招待される。毎週 催し物スケジュール表が配布されるから、学生は授業の 合間に聴講することができる。SAISの例を引き合いに 出すまでもなく、アメリカの大学では学生サービスが行 き届いている。

いまさらアメリカでもないが、出発前、人に会うたびにアメリカは初めてなのですといったら、ヘエーッとびっ

くりされ、アメリカ衰退論を耳にタコができるほど聞か され、ニューヨークはベイルートより怖いと脅かされ、 肩を叩かれ送りだされたが、聞くと見るとでは大違い。 没落しているどころか、昨年末の PLO 騒ぎで一目瞭然 の如くこの国なしでは実際には何ひとつ動かず、決まら ないのです。気になるのは、日本人がやたら奢り高ぶっ ていることで、かの国のリッチな面を嫌というほど見て しまうと、それにひきかえわが国は何と貧しいのでしょ う。最後にエピソードをいくつか。アメリカ人がみんな 英語を話すと思ったら大間違い。私のアパートからそれ ほど遠くないスーパーマーケットで買い物をしていたら、 耳に入る言葉といえば、スペイン語、中国語、韓国語ば かりでついに英語は聞こえずじまい。また、アメリカで MADE IN USA を見つけるのはたやすいことではな い。靴を買いにいったところ、並んでいるのは韓国製、 ルーマニア製、ユーゴ製ばかり。そのなかで選んだ靴は ハンガリー製だった。自由な国の不自由さ。政党はそれ ほど大差のない2大政党だけ。大統領選挙でも違いが余 りはっきりしない 2 候補のみ。ワシントンの地下鉄で通 勤客の読むのは『ワシントン・ポスト』。 差異を強調す る資本主義経済のアメリカで選択が限られているとは。 それにしても、アメリカのぶ厚く、内容豊富な新聞と比 べ、貧弱な日本の新聞はどうしてこんなに高いのでしょう。

# 若手研究者の声

## 「国際関係論の ペレストロイカ 」

高山 英男 (名古屋大学大学院)

(1) 現在,ソ連や中国をはじめとして,社会主義世界全体が改革期にある。それぞれの国家によって特殊性はあるものの,社会主義世界全体が抱えている問題とその解決の方向には,共通点が多い。しかし,中国における民主化運動の弾圧は,ソ連における人民代議員大会の模様とは対照的に,この問題が複雑であることを印象づけた。

時間的には、改革が始まったのは ソ連が最初ではないが、現在の社会 主義世界全体の改革の象徴は、ソ連 のゴルバチョフ書記長であり、その ペレストロイカ政策である。 (2) そのペレストロイカ政策を理論的に支えているが、「新しい思考」に基づく社会主義論と国際関係論である。その中で、国際関係論の「新しい思考」の前提は、現代世界を統一的で相互依存的世界とみる認識である。そのようにみなすことによって、ソ連は、資本主義世界との間に、相互依存関係を作り上げようとする。

しかし、社会主義諸国と資本主義 諸国との間には、対立関係はあった としても、資本主義諸国間のように は相互依存関係がない。そこで、相 互依存関係を設定する根拠として提 起されたのが「グローバル問題」の 存在である。「グローバル問題」を放 置すれば、「全人類的危機」となるの で、体制間の相違をこえて、「人類」 として協力し、相互依存的世界を管 理していこうというのが「新しい思 考」の核心である。

(3) このソ連の「新しい思考」は、現在の日本の国際関係論に大きな影

響を与える。まず最近の日本の研究動向でいえることは、いかにすれば「パックス・アメリカーナ」を維持できるか、さらに、そのためには日本はいかにすべきかという観点からの保守的国際関係論の色彩が強いということである。これに対して、「新しい思考」は、この「パックス・アメリカーナ」の世界秩序をソ連も含めて、共同管理することを提起する。

この二つの考え方の違いは次の点にある。日本の国際関係論は、「バックス・アメリカーナ」の維持を前提としつつ、管理のために、覇権か「レジーム」の必要性を論じている。世界や第三世界の権利と参加を組み込んだ世界秩序論を展望している。これは、現在の先進諸国に有利な国際秩序を修正せざるをえないだろう。ソ連の「新しい思考」は、「パックス・アメリカーナ」を前提とする国際関係論に対する批判の視座を与えてくれるのではないだろうか。

#### 国際学術交流基金委員会から

---1989年度第1回申請受けつけの結果---

さる4月10日発行のニューズレター第47号における公示によって国際学術交流基金の1989年度第1回申請を受けつけ、5月21日開催の国際学術交流基金委員会において審議した結果、以下のように、2件3名の会員を受給者として選定致しました。 受給者

#### 1 秋野豊・波多野澄雄両会員(筑波大学)

- a 活動:1989年9月26日~9月30日パリにおいてThe American University of Parisが主催する国際会議 International Conference on the Occasion of the Fiftieth Anniversary of the Opening of the Second World Warに出席, それぞれ, ペーパー"Japanese reaction to the Hitler-Stalin Pact" および "Japanese rapproachement with the USSR"を提出・報告
- b 受給額: 航空運賃(東京~パリ間)の一部および5日間滞在実費(合計40万円)
  - 2 伊豆見元会員(静岡県立大学)
- a 活動:1989年12月4日~12月5日ソウルにおいて韓国国防研究院(KIDA)とアメリカの戦略国際問題研究所(CSIS)が共催する国際会議「米韓安全保障関係の将来」に出席、ペーパー「米韓安全保障関係の変化と日本の政策」(仮題)を提出・報告
- b 受給額: 航空運賃(東京〜ソウル間)の一部および3日間滞在実費(合計10万円)

なお,今回,高柳先男会員(中央大学)が副主任に就 任することになりましたので,ご報告致します。

(国際学術交流基金委員会主任 大畠英樹)

# 編集委員会だより

編集主任 木 戸 蓊

1989年7月現在の機関誌編集計画は、以下の通りです。また、書評小委員会の欠員が増えましたので、以下のような構成で再出発することになりました。なお、私は次期編集主任予定者が在外研究中のため、暫定的に留任していましたが、7月末に渡辺昭夫会員(東京大学)に後を引き継ぐことになりました。これまでの怠慢と不手際をお詫びしますとともに、新任者に対する御支援と御協力をよろしくお願いいたします。

#### 機関誌刊行予定

(号数) (特集題目)

(編集委員)(刊行)

92「朝鮮半島の国際政治」 小此木政夫 1989. 10

93「国際政治経済学の模索」野林 健 90.1.

94「政治統合へ向かう EC」金丸 輝男 1990.5

95「中ソ関係と国際環境」 毛里 和子 90.10

96「1920年代のヨーロッパ 濱口 學 91. 1. 国際政治史」

#### 書評小委員会

黒柳米司(東洋英和女学院短期大学)——世話人=編集 委員会副主任,佐藤元英(外交史料館),田中明彦(東京 大学),広瀬崇子(大東文化大学),丸山直起(国際大学), 藪野祐三(北九州大学),油井大三郎(一橋大学)

# 原稿募集 機関誌『国際政治』第95号 「中ソ関係と国際環境」(仮題)

30年ぶりの「和解」を契機に、中ソ関係を歴史的に分析し、あるいは構造的に把握し、また今後の社会主義世界を展望する特集を計画しており、意欲的な諸論稿を募集いたします。とくに、(イ)中ソ関係の展開それ自体、(ロ)中ソ関係を規定し、拘束した国際環境、とくに米のアジア政策、米ソ関係などの動き、(ハ)中ソ関係のアジア民族運動への波及、(ニ)中ソ関係とアジアの地域紛争、(州社会主義の国際関係をめぐる問題、(ハ中ソイデオロギー論戦の今日的意味などについて、多面的かつ鋭く分析した特集にしたいと考えます。

多くの会員のご応募をお願い申し上げます。

原稿締切:1990年3月末(厳守)

発行予定:1990年10月

ご連絡、お問い合わせは毛里和子にお願い致します。

お知らせ――衛藤藩吉会員(亜細亜大学学長)より, 「このほど国際宇宙法学会理事を辞任しました」との連絡がありましたので,あらためてお知らせいたします。 (編集委員会)

《編集後記》『ニューズ・レター』(No.48)をお届けいたします。本号は、一橋大学で開催された春季研究大会の概況の報告を中心に編集されたものです。編集部の不手際もあり、各部会の司会者(報告者)に多大のご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。なお、本号掲載の各部会・分科会の概要に関する原稿は7月15日をもって締切らせていただきました。(S)

「日本国際政治学会ニューズレターNa48」 (1989年 7 月25日発行)

発行人 有賀 貞

編集人 佐藤 栄一 **〒**226 横浜市緑区 三保町32 東洋英和女学院短期大学

TEL. (045) 922 - 4561

印刷所 ㈱西村印刷 TEL. (03)552-1677